



TITLE:

# 変換半群によるオートマトンの特性化 (オートマトン理論および言語理論の新展開)

AUTHOR(S):

渡辺, 敏正; 野口, 正一; 大泉, 充郎

---

CITATION:

渡辺, 敏正 ...[et al]. 変換半群によるオートマトンの特性化 (オートマトン理論および言語理論の新展開). 数理解析研究所講究録 1976, 270: 39-45

ISSUE DATE:

1976-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/105915>

RIGHT:

## 変換半群によるオートマトンの特性化

東北大学電気通信研究所

渡辺 敏正

野口 正一

東北大学応用情報学研究センター

大泉 亮郎

## 1. はじめに

有限オートマトンの代数学理論においては、 $\Sigma$  を入力記号の有限集合とするとき、入力半群を  $\Sigma$  から生成される自由半群  $\Sigma^+$  (空語を含まない) とする立場と  $\Sigma$  から生成される自由単位半群  $\Sigma^*$  ( $\Sigma^+$  に空語を付加したもの) とする立場がある。工学的観点からは後者が一般的であるが、前者は半群の表現として数学的に興味深い。

我々は (7) で  $I = \Sigma^+$  とする立場からオートマタの融合<sup>(7)(8)</sup>を定義導入し、これとオートマタの直和、付随する入力半群 (変換半群に同形) から生成されたオートマトン及びその商オートマトンによって、付随する入力半群が左単位元をもつ有限オートマトンの状態遷移構造を半群論的に与えた。

本稿では、(7) の結果を基礎として上記の立場の違いが付随する入力半群に着目したオートマトンの分類に与える影響

を明らかにする。また、オートマタの融合と直積の関係についても言及する。

## 2. 準備

〔定義1〕 オートマトンは三項系列  $A = (Q, I, M)$  である。ここに、 $Q$  は状態の空でない有限集合、 $I = \Sigma^+$  (または  $\Sigma^*$ ) は入力半群、 $M: Q \times I \rightarrow Q$  は状態遷移関数と呼ばれる写像で、 $\forall q \in Q, \forall x, y \in I$  に対して  $M(q, xy) = M(M(q, x), y)$ 。

〔定義2〕  $A$  において  $I$  上の関係  $\rho_x, \rho_y$  をそれぞれ  $x \rho_x y \iff M(q, x) = M(q, y)$ ,  $\rho = \bigcap_{x \in Q} \rho_x$  ( $x, y \in I$ ) と定義し、 $I$  の  $\rho$  を法とする商半群  $I/\rho$  を  $A$  に付随する入力半群 ( $\bar{I}(A)$  または  $\bar{I}$ ) という。

なお、以下で特に定義される用語、記号等は (5) ~ (8) を参照のこと。

〔定理1〕<sup>(7)</sup>  $A = (Q, I, M)$  ( $I = \Sigma^+$ ) は  $\bar{I}(A)$  が左単位元をもつとする。このとき、 $A = \bigoplus_{i=1, k_i}^m ( \bigoplus_{j=1, k_j} A_{ij} )$  と表わされ、かつ  $\bar{A} \cong \bigoplus_{i=1, k_i}^m ( \bigoplus_{j=1, k_j} \lambda_{ij} )$  である。ここに  $\lambda_{ij} = (\lambda_{ij})_{ij}$ ,  $V_{ij} = \text{Inf}(S, T_{ij})$ ,  $O_{ij} = \text{ex}(T_{ij}, T_{ij})$ ,  $k_i \geq 1, i=1, \dots, m(ZI)$ 。

定理1及び  $I = \Sigma^*$  の空語の性質より

〔定理2〕 任意の有限オートマトン  $A = (Q, I, M)$  ( $I = \Sigma^*$ ) は  $A = \bigoplus_{i=1, k_i}^m ( \bigoplus_{j=1, k_j} A_{ij} )$  と表わされ、かつ  $\bar{A} \cong \bigoplus_{i=1, k_i}^m ( \bigoplus_{j=1, k_j} \lambda_{ij} )$  である。ここに  $\lambda_{ij} = (\lambda_{ij})_{ij}$ ,  $S = \bar{I}(A)$ ,  $k_i \geq 1, i=1, \dots, m(ZI)$ 。

### 3. 付随する入力半群によるオートマトンの分類

定理1, 2を基礎に1と2によってオートマトンを分類する。

#### 3-1. $I = \Sigma^+$ の場合

[定義3] 付随する入力半群が, 左単位元をもつ半群, 単位元をもつ半群, 右単純半群, 右群, 群であるオートマトンをそれぞれ, 左単位形 ( $A^L$ ), 単位形 ( $A^E$ ), 右単純形 ( $A^{RS}$ ), 右群形 ( $A^{RG}$ ), 群形 ( $A^G$ ) オートマトンという。

オートマトン族を  $C$  で表す。

[補題1]  $S$  が右単純ならば  $\mathcal{AV}_i, \mathcal{AO}_i, i=1, \dots, k (k \geq 2)$  の自明でない融合は存在しない。

右群は右単純かつ左単位元をもつことから

[補題2]  $C(A^L) \not\supseteq C(A^{RG})$  かつ  $C(A^{RS}) \not\supseteq C(A^{RG})$ 。

(備考)  $C(A^L) \not\supseteq C(A^{RS})$  かつ  $C(A^{RS}) \not\supseteq C(A^L)$ 。

次に,  $\text{Truth}^{(4)}$  により導入された状態独立性 ( $\forall q, q' \in Q, S_q = S_{q'}$ ) を検討する。

[補題3]  $A = (Q, I, M)$  を状態独立オートマトンとする。このとき,  $I(A)$  は右群である。

補題3をもとに  $\mathcal{AV}, \mathcal{AO} (V = \text{Inf}(S), \theta = \text{ex}(\tau), S \text{ は右群})$  の状態独立性を検討して次の補題を得る。

[補題4] 弱連結オートマトン  $A$  が状態独立である  $\iff$

$\bar{A} \cong \mathcal{A}_V$ . ここで,  $V = \text{Inf}(S, T, \varphi)$  で  $S$  は右群とする.

定理1, 補題4 より

[定理3]  $A = \bigoplus_{i=1, \dots, m} A_i$  ( $A_i$  は弱連結) が状態独立オートマトンである  $\iff \bar{A} \cong \bigoplus_{i=1, \dots, m} \mathcal{A}_{V_i}$ . ここで  $V_i = \text{Inf}(S, T_i, \varphi_i)$ ,  $i=1, \dots, m$ , かつ  $S = \bar{I}(A)$  は右群である.

明らかに状態独立でない右群形オートマトンが存在するから, 状態独立オートマトンを  $A^{SI}$  と表わせば,

[補題5]  $C(A^{RG}) \not\subseteq C(A^{SI})$ .

$A^P$  及び  $A^{SP}$  をそれぞれ置換オートマトン及び擬完全オートマトンと表わせば,

[補題6] <sup>(5)(6)</sup>  $C(A^G) \not\subseteq C(A^P) \not\subseteq C(A^{SP})$ .

完全オートマトン及びカウンタをそれぞれ  $A^{PA}$  及び  $A^C$  と表わすとき,  $C(A^{SP}) \not\subseteq C(A^{PA}) \not\subseteq C(A^C)$  は既知である. また, 明らかに  $C(A^{RG}) \not\subseteq C(A^G)$  である. 以上をまとめ,

[定理4]  $C(A^L) \not\subseteq C(A^I), C(A^L) \not\subseteq C(A^{RG}) \not\subseteq C(A^G) \not\subseteq C(A^P) \not\subseteq C(A^{SP}) \not\subseteq C(A^{PA}) \not\subseteq C(A^C)$ .  $C(A^{RG}) = C(A^L) \cap C(A^{RG}) \not\subseteq C(A^{SI})$ .

3-2.  $I = \Sigma^*$  の場合.

$I = \Sigma^*$  の場合の  $A$  と区別するため  $\lambda$  を添えて  $A_\lambda$  と表わす.

定理2より, 有限オートマトンを  $A^F$  と表わせば,

[補題7]  $C(A_\lambda^F) = C(A_\lambda^I)$ .

右群が単位元をもてば実は群であることから,

$$[\text{補題 8}] \quad C(A_\lambda^{RG}) = C(A_\lambda^G).$$

補題 4, 8 より

$$[\text{補題 9}] \quad \text{弱連結オートマトン族に関するときは } C(A_\lambda^{SI}) = C(A_\lambda^{SP}).$$

$$[\text{補題 10}]^{(5)} \quad C(A_\lambda^G) = C(A^P) = C(A_\lambda^P).$$

補題 10, 定理 3 より

$$[\text{補題 11}] \quad C(A^P) \neq C(A_\lambda^{SI}) \neq C(A^{SP}).$$

以上をまとめて

$$[\text{定理 5}] \quad C(A_\lambda^F) = C(A_\lambda^I) \neq C(A_\lambda^{RG}) = G(A_\lambda^G) = C(A_\lambda^P) = C(A^P) \neq C(A_\lambda^{SI}) \neq C(A^{SP}) \neq C(A^{PA}) \neq C(A^C).$$

#### 4. オートマトンの直積分解性

(7) で定義導入されたオートマトンの融合とオートマトンの直積分解性の互からみた関係を述べる。

[定義 4]  $A = (Q, I, M)$  が  $A_i = (Q_i, I, M_i), i=1, \dots, k$  ( $k \geq 2$ ) の直積である ( $A = \bigotimes_{i=1}^k A_i$ ) とは,  $A$  が

$$(1) \quad Q = Q_1 \times \dots \times Q_k \quad (Q_i \cap Q_j = \emptyset \quad (i \neq j)),$$

$$(2) \quad \forall g = (g_1, \dots, g_k) \in Q, \forall x \in I \text{ に対して, } M(g, x) = (M_1(g_1, x), \dots, M_k(g_k, x)),$$

をみたすときをいう。

[定義 5]  $A^P = (Q^P, I, M^P)$  が  $A = (Q, I, M)$  の直積分解があるとは,  $A^P$  が

(1)  $A^D = \bigotimes_{i=1, k} A_i$  ( $k \geq 2$ ) かつ  $|Q_i| \leq Q$  ( $i=1, \dots, k$ ),

(2)  $\bar{I}(A) \cong \bar{I}(A^D)$

なるときをいう。

[補題12]  $\bar{I}(\bigoplus_{i=1, k} A_i) \cong \bar{I}(\bigoplus_{i=1, k} A_i) \cong \bar{I}(\bigotimes_{i=1, k} A_i)$   
 $\cong S/L(\bigcap_{i=1, k} T_i)$ 。ここで  $Q_i = \text{ex}(T_i)$ ,  $i=1, \dots, k$ , とする。

補題12, 定理1より

[定理6] 左単位形オートマトン  $A = \bigoplus_{i=1, m} (\bigoplus_{j=1, k_i} A_{ij})$  に対して,  $A$  の直積分解  $A^D = \bigotimes_{i=1, m} (\bigotimes_{j=1, k_i} A_{ij})$  が存在する。こゝに,  
 $\bar{A} \cong \bigoplus_{i=1, m} (\bigoplus_{j=1, k_i} A_{ij})$ ,  $L(\bigcap_{i=1, m} (\bigcap_{j=1, k_i} T_{ij})) = \mathcal{L}_S$ ,  $Q_{ij} = \text{ex}(T_{ij})$ ,  $i=1, \dots, m$ ;  $j=1, \dots, k_i$ , かつ  $m + \sum_{i=1, m} k_i \geq 2$  とする。

なお,  $I = \Sigma^*$  の場合も同様の定理が成り立つ。さらに,

[補題13]  $A_0$  の直積分解  $A_0^D = \bigotimes_{i=1, r} A_{0i}$  ( $r \geq 2$ ) が存在するための必要十分条件は,  $|V_0| \geq |V_{0i}|$  なる  $A_{0i}$ ,  $i=1, \dots, r$ , が存在して,  $L(\bigcap_{i=1, r} T_i) = L(T)$  が成り立つことである。ここで,  $Q = \text{ex}(T)$ ,  $Q_i = \text{ex}(T_i)$ ,  $i=1, \dots, r$ , とする。

$I = \Sigma^*$  の場合にも同様の補題が成り立つ。

定理6と補題13により左単位形オートマトン ( $I = \Sigma^*$  の場合にはすべての有限オートマトン) の直積分解性が明らかとなる。

5. おわりに。

オートマトンの入力半群を  $\Sigma^+$  とするか  $\Sigma^*$  とするかによって

特性化に大きな違いが生ずることを考慮に入れ、付随する入力半群に着目してオートマトンを分類した。その結果、従来明確でなかった状態独立オートマトン族が  $I = \Sigma^+$  の場合には右群形オートマトン族の真部分族であること、 $I = \Sigma^*$  の場合には置換オートマトン族の真部分族であること及び弱連結オートマトン族においては擬完全オートマトン族と一致することなどを明らかにした。さらに、付随する入力半群からみたオートマトンの融合と直積の関係についても明らかにした。最後に、本学電気通信研究所野口研究室の皆様のご熱心なる討論に深謝いたします。

## 文 献

- (1) Clifford, A.H. and Preston, G.B.; Amer. Math. Soc. (1967).
- (2) 増永, 野口, 大泉; 信学論(C), 53-C, 3, p.149 (昭45-03).
- (3) 田村; 共立出版(1972).
- (4) Trauth, Jr. C.A.; J. ACM, 13, 1, p.170 (1966).
- (5) 渡辺, 増永, 野口, 大泉: "置換オートマトンの構造論", 信学論(D) 投稿中.
- (6) 渡辺, 増永, 野口, 大泉; 信学技報 Vol.75, No. 18 (1975-04)
- (7) 渡辺, 増永, 野口, 大泉: "左単位形オートマトンに関する考察", 信学論(D) 投稿中.
- (8) 渡辺, 野口, 大泉; 信学会オートマトンと言語研究会(1976-02) 予定.